

〔令和元年度 博士学位論文要旨〕

日本における「忍者」のイメージ形成と定着
— 神仙道教要素のフィクションにおける受容と展開 —

言語教育研究科 比較文明文化専攻 博士後期課程 中島 慧

(論文要旨)

本論では、日本における道教の展開の一例として、近世の都市部における宗教(怪異、呪術)の娯楽化という点に注目して、幕末期の娯楽作品に登場する仙人や仙術の扱われ方を分析し、中国道教における本来的な仙人譚の翻訳・翻案とも、仏教の修行僧と同一視される仙人とも異なる仙人観の発展について考察した。

近世日本のフィクション作品において、主に「仙術」は「妖術」とされ、「仙人」は「妖術使い」として描写され、さらに各作品の中で創り上げられたそれらのバリエーションは一つのイメージに集約されて行く。本論は、そのイメージとは「忍者・忍術」である、と想定するものである。よって、本論では、フィクションにおける「忍者・忍術」のイメージの形成過程を追うことにより、中国道教とは異なる日本特有の仙人観のあり方を探っていくことにした。

本研究の目的は、娯楽作品を題材として、そこに近世日本の一般大衆が持つ仙人観の反映が「忍者・忍術」のイメージを形成している、と示すことで、中国道教の中核を成す神仙思想の日本的な受容・展開を明らかにすること、そして特にそれは呪術性への強い嗜好を前提として行われている、ということをも主張することである。

第一部では、日本の一般大衆における神仙道教観の一端を明らかにするために、近世庶民文化の分析、主にフィクションにおける忍者・忍術に関する分析を行った。

近世日本の娯楽作品においては、怪異として死んだ人間、つまり、人間の化物である幽霊が主に用いられるように、フィクション=娯楽として消費し楽しむものであっても、その関心の対象には「人間」が置かれている。そのような中で、死んでいない人間(=生身の人間)を超常的に描く場合、一般大衆の支持を得る、好まれる姿としては、仏教的な解釈から自由で、視覚的なインパクトの大きい「呪術」を用いる超人になるだろう。このようなキャラクターは、幕末期にフィクションにおいて一ジャンルを築いた「妖術使いもの」、さらに、近代以降に「妖術使いもの」を引き継いで発展する「忍者もの」の中に、主に超常的な「忍術」を使用する「忍者」として登場することになる。

そして、フィクションにおける「忍者・忍術」のイメージ形成の過程からは、「ジライヤ」というキャラクターが、重要な通過点であると考えられる。よってここでは「ジ

ライヤ」ものについて考察し、そこに見られる怪異や妖術等の超常的現象の表現について分析した。このような分析から、中国では道教世界観の中で育まれた呪術的要素が、日本の庶民文化の中では、近世においてどのように受容・展開・消費されていったか考察した。

第二部では、第一部で挙げた、日本の近世庶民文化における忍者・忍術のイメージ形成の基盤に、日本文化に取り込まれた道教的呪術要素の強い影響があることを示すために、近世に至るまでの日本における、道教的要素の日本的展開について、主に呪術という点に注目して整理・分析を行った。

日本では、道教的呪術は様々な分野に取り込まれ、以後も宗教的な文化の中で保存され続けるが、中国神仙道教において不老不死を象徴する仙人という存在は、その最も重要であるはずの「不死性」に関心を向けない日本においては、大きく変質することになる。中国においては不老不死を象徴・具現する仙人に対して、日本では、人間の延長線上の存在としてではなく神仏の一種として受け取られる、若しくは文学上の装飾として受け入れられている、と整理できる。

中国神仙道教においては不老不死の仙人になることを窮極の目的とするため、その呪術的要素も不老・延命を求めることに関連するものが多い。日本では中国神仙道教の中核である不老不死の仙人になることを求める思想は嗜好に合わなかったようであるが、不老や延命、除災といった中国道教の呪術が持つ現世利益的な効能に対しては関心があった。よって、それらは陰陽道や修験道を通して広まり、民間信仰の中にも道教的な呪術が入り込んだのだ、と考えられる。

本論では、日本における神仙道教要素の受容・展開の一例を示すものとして、フィクション、娯楽作品を取り扱った。その理由は、フィクションの中の怪奇現象や怪異の描写は、主に読者である一般大衆の嗜好に基づいて創作されると見なされ、従って、一般大衆がそれに相応しいと感じる表現に道教的要素が用いられているという事実の中に、我々は近世江戸期における一般大衆の道教・道教的要素に関する理解、好みの志向の反映を見ることができる、と考えたからである。本論は、道教の呪術、そしてその（主な）行使者である仙人の姿として「忍者」を想定し、これは日本的にかみ砕かれ、理解された仙人像の日本における終着点であると主張するものである。結局、中国道教の仙人・神仙道は、日本においては「忍者・忍術」として文学・文芸を基点とした庶民文化の中に保存されている、と言えるだろう。この「忍者・忍術」におけるイメージの大部分は「印を結んで呪文を唱えるとドロン」といった超常的存在として語られる。ここには、中国道教において中核をなした「不老不死」という要素を脱落させる半面、「呪術」の受容については積極的であった、という日本特有の呪術に対する興味・関心の高さとその嗜好の在り方が見出されよう。

いかに「忍者」の価値を、これまでの先行研究が描いてきたような「史実」や「精神性」に求めようとも、一般的な「忍者」のイメージは、あくまでも超常的な「忍術」を

使用する特殊な存在というものなのである。それは、肉体を変質・改造させる行為を忌避し、中国道教的工程によって形成される仙人を否定的に見ながらも、その過程によってもたらされる（と考えられる）超常を操る技術のシステム＝「呪術」を望み、求め続けた人々の理想によって、「忍者」が成り立っているからである。

「呪術」とは、人間が超常に干渉し操作・支配するためのシステムである。日本における道教は教団組織の成立という方向では展開しなかったが、中国において道教世界観によって形成された呪術体系は日本でも魅力的であったのか、積極的に取り込まれている。しかしながら、この「呪術」の受容において、日本と中国との間には、意識の違いが存在する。中国道教において、超常を操作する「呪術」の主な行使者は、「不老不死」の肉体を持つ仙人である。が、日本では中国道教的な仙人は一般的な共感を得難い存在であるため、そのまま受容されることは無かった。そこで仙人の代わりに登場するのが「忍者」である。

フィクションにおける「忍者」とは、一般大衆が「生身の肉体」のまま、超常を操作できる「呪術」を駆使する存在として生まれたものである、と考えられる。日本では、中国道教的工程によって形成された仙人の根底的要素である「不老不死性」を脱落させると同時に、超常的な「呪術」のみを際立たせ、この超常的な「呪術」を「忍術」として、これを使用する「忍者」というものを創造したのである。